

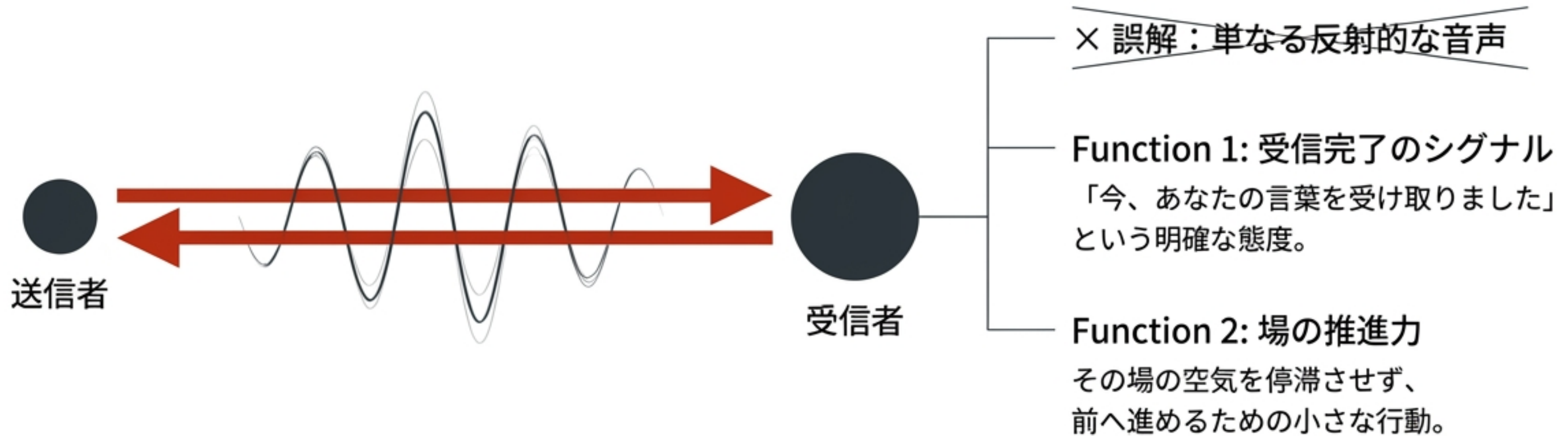
「はい」を二音に分解する人は、嫌われやすい。

は・い

たった一言に宿る「最小の人間力」の解剖学

Based on the philosophy of PHOENIX Aichi

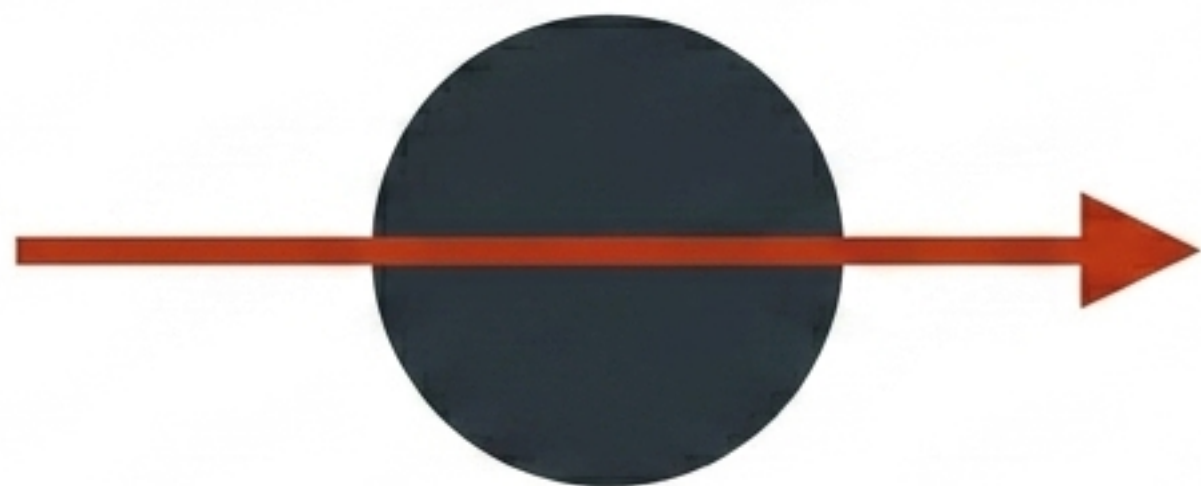
返事はただの「音」ではない



「たかが返事。そう思っている人ほど、たぶん返事で損をしている。」

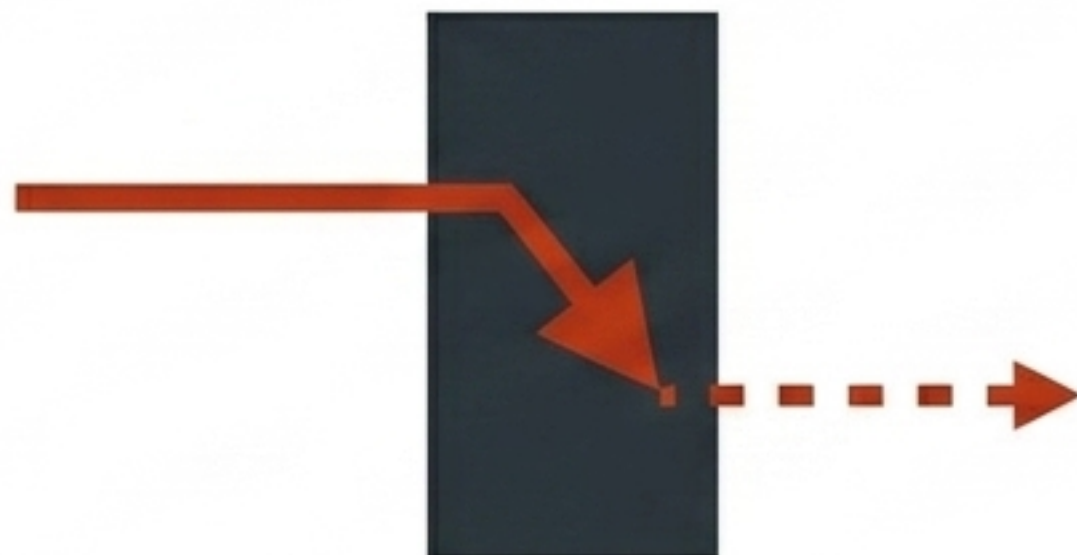
「はい」と「は・い」の決定的差異

一音の「はい」



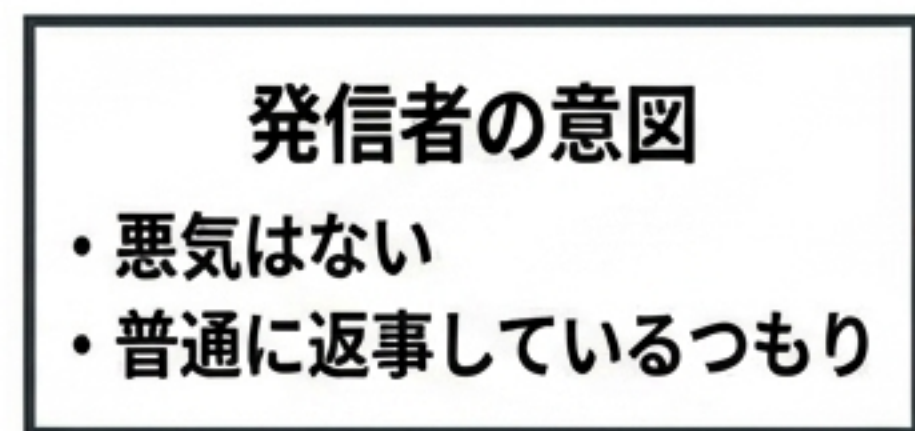
一音で出す「はい」。
相手に真っ直ぐ届く推進力。

二音の「は・い」



二音に分解された「は・い」。
返事ではなく「保留」や「壁」として機能する。

コミュニケーションの非対称性

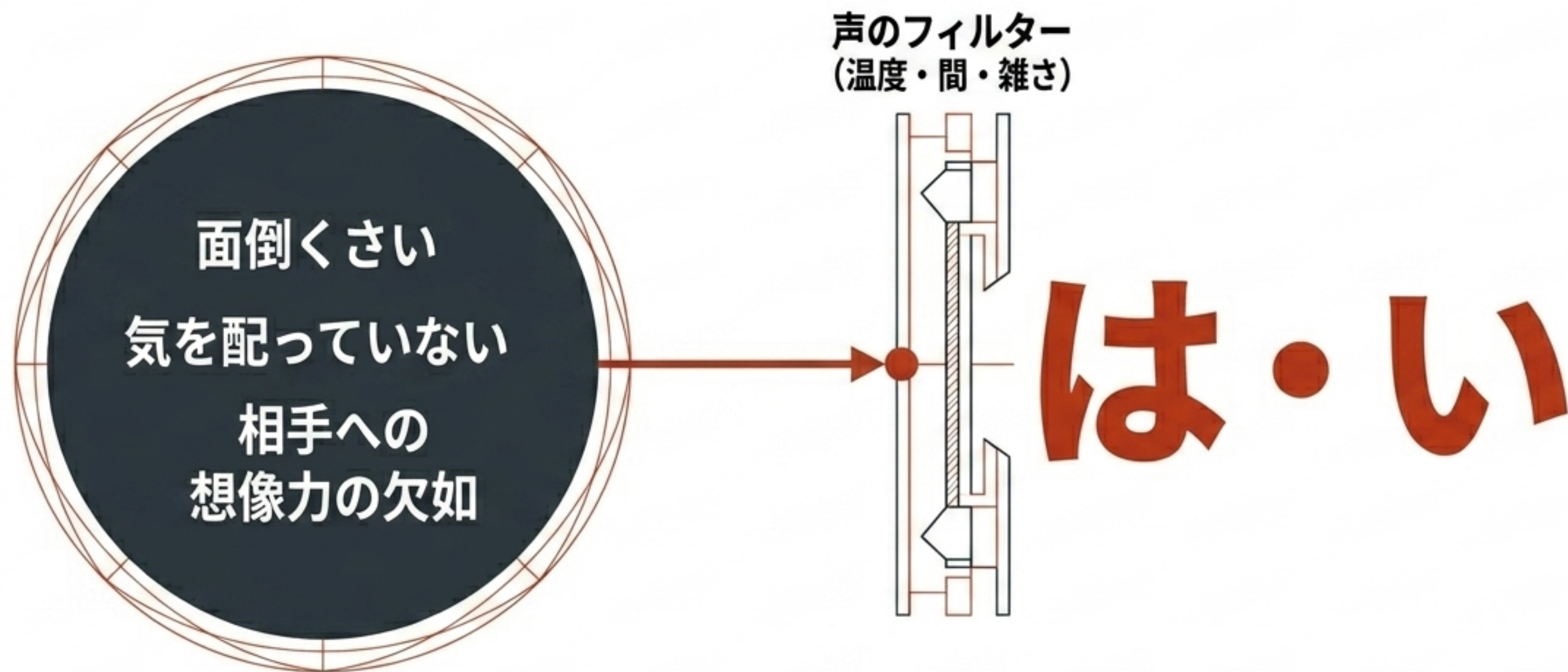


受信者の解釈（現実）

- 嫌々返事している
- 納得していない
- 言いたいことを飲み込んでいる
- 本当は従いたくない

本人の意図ではなく、相手に与える印象でコミュニケーションは成立してしまう。
「は・い」は、相手に微妙な拒否として届く。

人格ではなく「状態」が漏れ出ている



たった一言の「はい」に、その瞬間の状態が全て乗る。
人は大きな発言だけでなく、何気ない返事という小さな出力で信頼を積み上げたり、削ったりしている。

うなずきのパラドックス：なぜ声を出さないのか？



「楽だからうなずく」のではない。声を出さないのは、自分の状態（前向きか、嫌々か）を相手に見せないための回避（防衛機能）である。

「中島さんなら大丈夫」という甘えの罠

4. 劣化

静かに場の質と信頼関係が落ちていく。

3. 軽視

相手がどう受け取るかの想像力を放棄する。

相手を信頼しているようでいて、実際には相手の受け取り方を軽視している。この「甘え」が場を壊す。

1. 過信

「この人なら怒らない・許してくれる」という安心感。

2. 省略

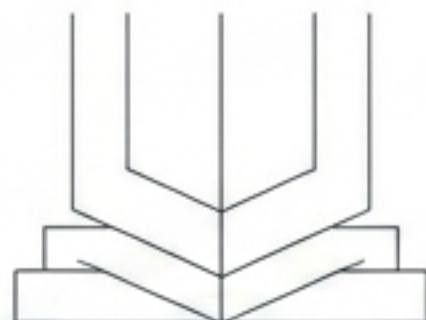
返事を雑にする、または声を出さない。

誰のための返事か（良い返事の3機能）



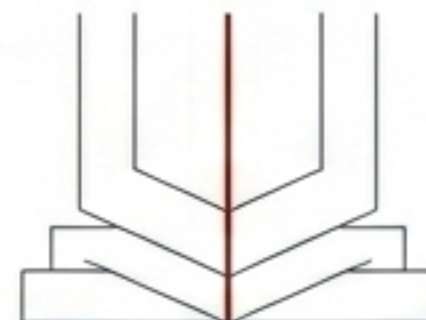
安心 (Safety)

相手の言葉を宙ぶらりんにならない。
「届いた」と感じさせる。



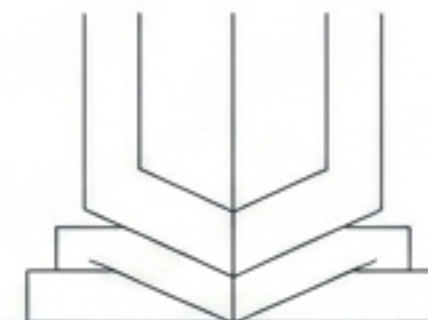
推進 (Momentum)

コミュニケーションの停滞を
防ぎ、場を前へ進める。



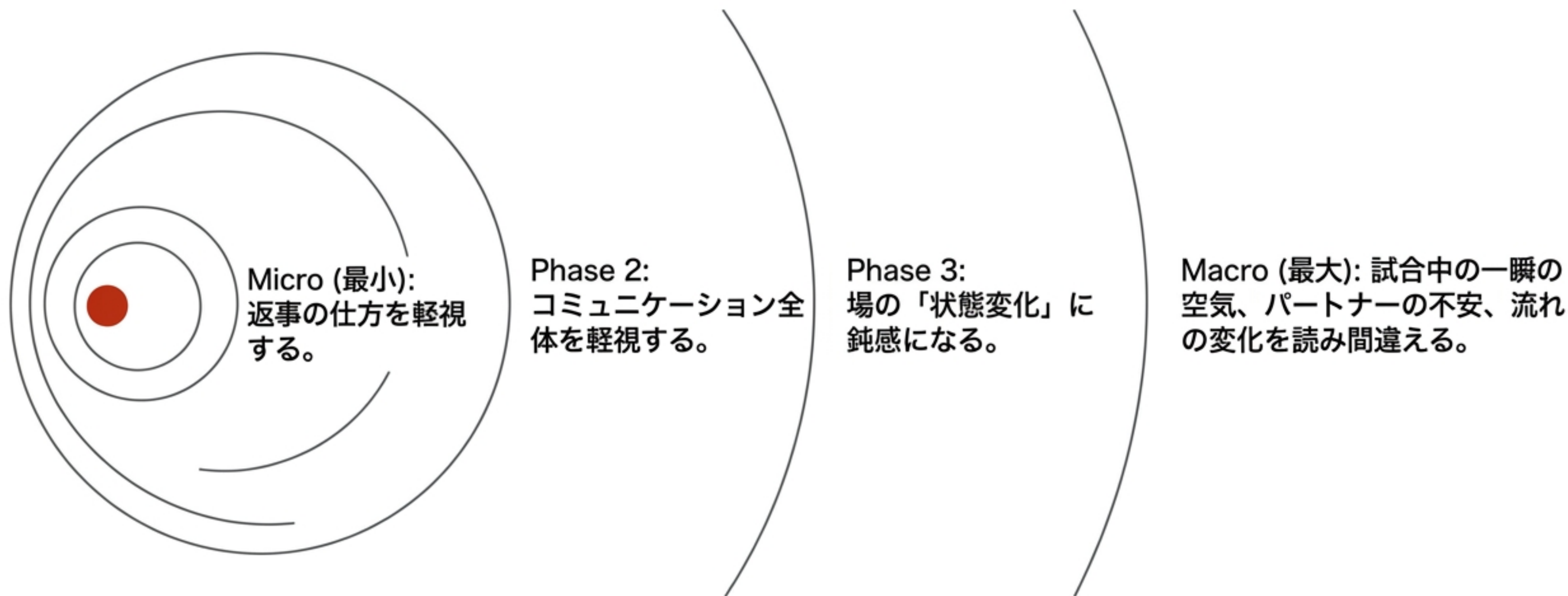
敬意 (Respect)

相手の存在と発言に対する、
最小の愛情表現。



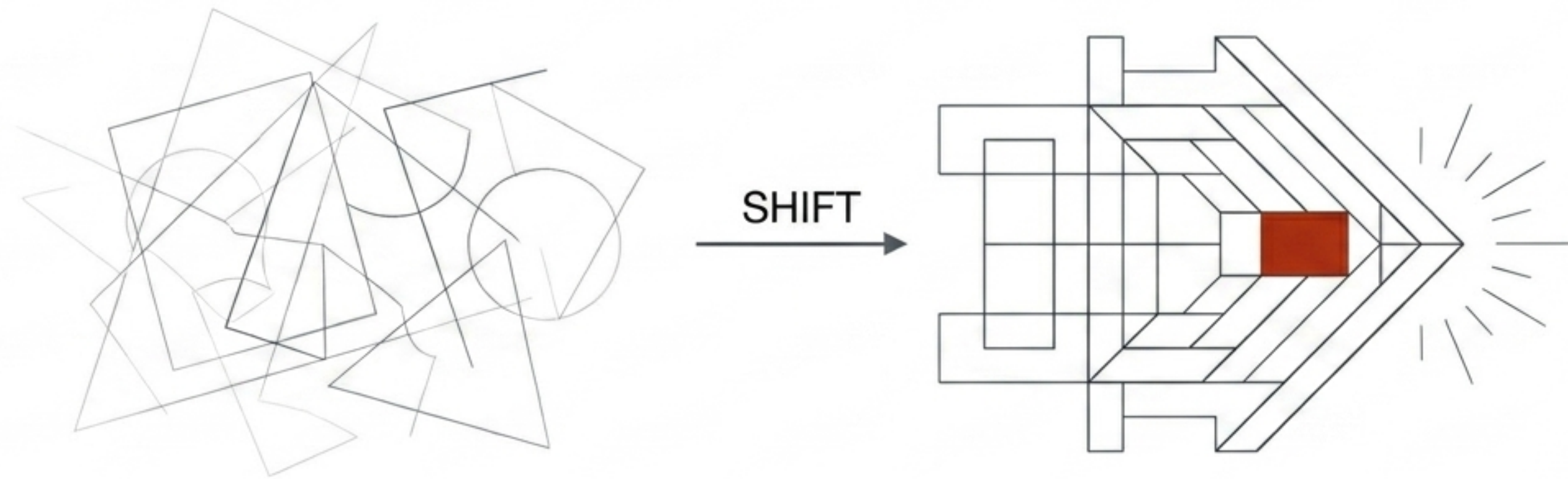
ただ大きければいいわけではない。元気ならいいわけでもない。
相手に気持ちよく届くように返事をする事は「技術」である。

バタフライ・エフェクト：微細なサインが場を支配する



「はい」の一言にすら無自覚な人が、複雑な状況を高精度に読めるとは考えにくい。
返事とは、日常の「反応精度」を鍛える練習である。

「はい」は礼儀ではなく、高度な「技術」
「はい」は礼儀ではなく、高度な「技術」



× 誤解	○ 本質
<ul style="list-style-type: none">・怒られないためのマナー・体育会系のノリ	<ul style="list-style-type: none">・曖昧な自分を、前向きな行動へ切り替える「スイッチ」・相手に安心を渡し、自分の状態を整える「チューニング」

たった一言に、思考の浅さ、逃げ、他人事感、そして敬意の量がすべて現れる。

見逃されるからこそ怖い、静かな崩壊

人間関係を壊すのは、大事件ではない。
小さな無自覚の積み重ねである。

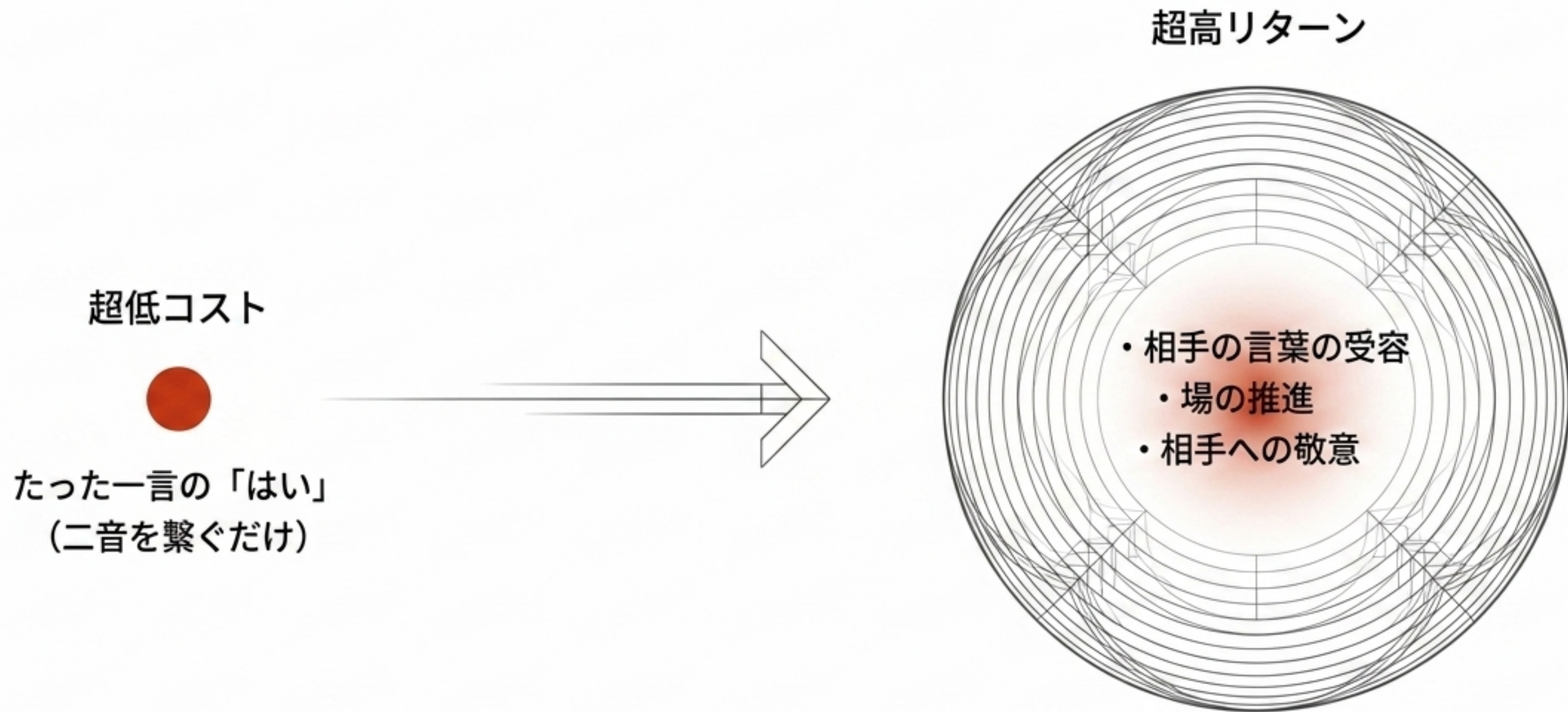
本当に聞いているのかな？

自分の話は軽く扱われているのかな？

嫌なのかな？

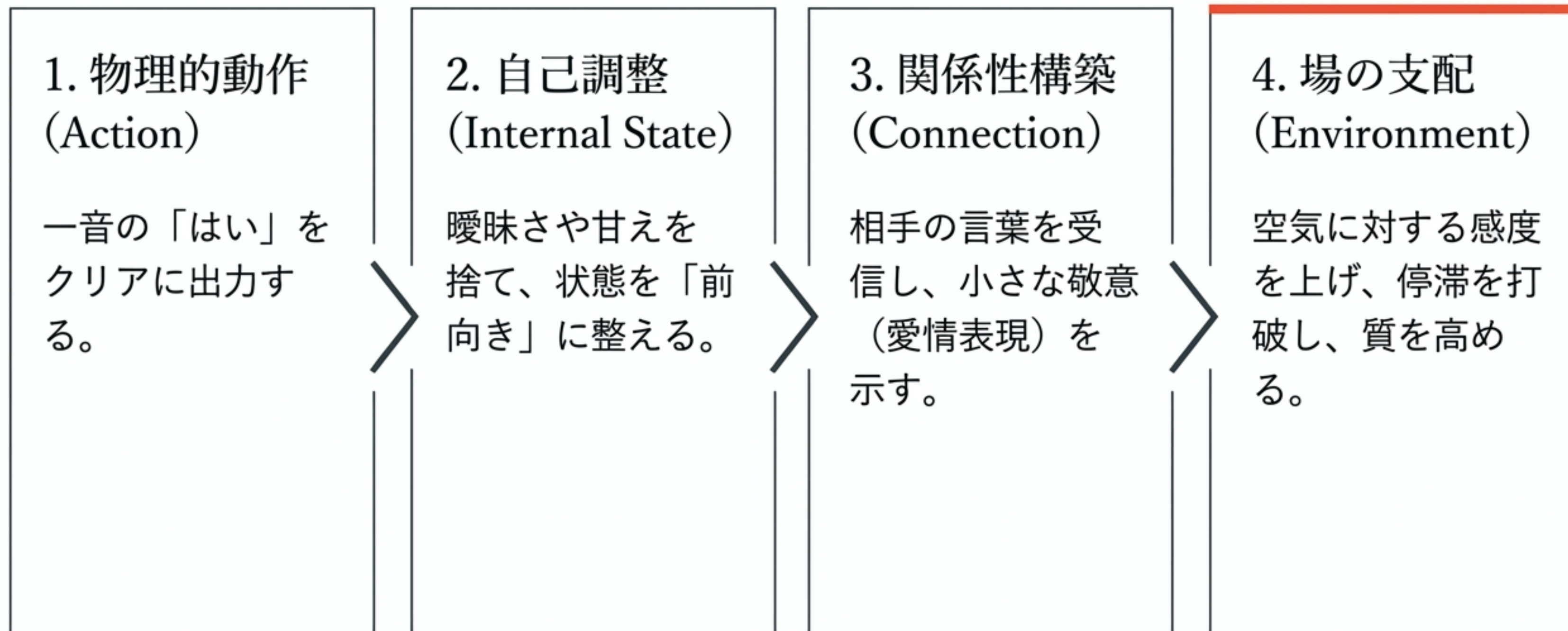
悪気はなくても、確実に何かは相手の中に残る。
この「小さな違和感」が、静かに、しかし確実に信頼を削っていく。

最強のコストパフォーマンス



「はい」は単なる返事ではなく、ものすごく小さな愛情表現。
こんなにコストの低い信頼形成は、他に存在しない。関係の入口で損をしてはいけない。

The Master Framework: 返事の解剖学



返事とは、
最小の行動であり、
最小の敬意であり、
最小の人間力である。

たった一言の「はい」を整える人は、
静かに信頼される人になっていく。

